

## 編集者のいるかもしれない宇宙

松田 徹

リーマンたらんと欲し、かつ現実にもそのように行動しなくてはならない。いうまでもなく、時間と服装の両面にわたって規律正しくしなければならぬ。現実に出世する編集者はみなそのようにふるまっている（はずである）。決して酒を飲むなどとはいわないが、泥酔の頻度と程度も一般サラリーマンなみであることが切に希望される。

世の中にいろいろな迷信があるなかで、編集者という人種は本を多量に、しかも超絶的なスピードで読みこなし、本についての情報ここに集中せりといった風情でたたずんでいるというそれは、今なお根絶されているとはいえない。いささか困ったことである。そんな編集者は全くいないとはいわないにしても、まずめったにお目にかかれるしろいものでないことは断言しよう。

今さらいうのは気はずかしいようなことだが、編集者とはサラリーマンの一亜種である。二世紀も間近にせまったエントロピー時代、編集者はひたすら一般と何かかわるところのない純正サラ

ではない。実をいえば昔からそんな編集者なんていたためしはなかったのだ。それでは編集者という職業は何によって定義されるのだろうか。本に対する構えや知識の量によってか？ そうではあるまいという予断を今のべた。それではいったい何によって？ 本に対する知的感度や知識の量と質、いずれにおいても読書好きの一般人の方が編集者にまさっているし、その傾向はもはやおしとどめるすべもなく進行中のようにみうけられる。職業による痴鈍化はそれほどまでに編集者の精神をむしばんでいるのだろうか。

編集者に独特な本の読み方というものがあるのかどうかは知らないが、そんなものはないとはつきり言い切ってしまうこともできないように思う。最初の数ページ（あるいは、はしがきやあとがきのみ）を読んで、あたかも全体を読破したふりをする（こと、たまたま見知っている著者や出版界の裏話を小出しにして事情通をよそおうこと等々をふり出しに、総じていえばいかにあざやかか）に本に詳しいふりをするか、この演技によって編集者という職業のかんりの部分は支えられている。まじめな話、私はこの種の演技こそ編集者を編集者たらしめる最も重要な要素であると思っっている。しかし、この「ふりをする」演技は、少なからずある種の勘と想像力の作用に裏打ちされている。だからこの演技は、「見立て」や「もどき」に類する心の働きをごく当然のこととして含みもっている。編集という作業は芸能であり、編集者は読み物という見世物を組織し演出する遊芸民なのである。

ところで、拙宅の長椅子のまわりには常時三〇冊前後の読みかけの本が雑然と積み重なっている。読みかけとはいってもその程度は千差万別なのであるが、ちなみに五月八日現在のその本たちの顔ぶれは正直に書けば、次のとおりである。（雑誌はのぞく。また、配列には何の意味もない。）

- 岡本綺堂、明治劇談ランプの下にて
- エンツォ・ピアージ、新イタリア事情（上・下）
- 黒田壽郎（編）、イスラム辞典
- Louise Brooks, *Lulu in Hollywood*
- Walter Pater, *Imaginary Portraits*
- 中上健次、地の果て至上の時
- Ann Tyler, *Dinner at the Homesick Restaurant*
- ヴァルター・キアウレン、わが友出版人——エルンスト・ローヴォルトとその時代
- ベルリオーズ回想録（一・二）
- George Antheil, *Bad Boy of Music*
- 山田風太郎、エドの舞踏会
- 森川久美、南京路に花吹雪（一〜三）
- Philippe Beausant, *Versailles, Opera*
- エミール・パンヴェニスト、一般言語学の諸問題
- 狩撫麻礼（作）・谷口ジロー（画）、ライブ・オデッセイ（一〜三）
- Thérèse Moreau, *Le Sang de l'histoire*
- マルセル・ドゥティエニス、アドニススの園
- 出口裕弘、ロートレアモンのパリ

- William Graham Sumner, *Folkways*
- 張樂平、三毛流浪記選集
- Frank McConnell, *Storytelling and Mythmaking*
- Gregor T. Goethals, *The TV Ritual*
- ロバート・ヴェンチャーリ、建築の多様性と対立性
- 斎藤緑雨集（明治文学全集）
- 勝俣鎮夫、戦国法成立史論
- トマス・ハーディー、諸王の賦
- ブルノー・スネル、詩と社会——社会意識の起源に対するギリシャ詩人の影響
- イブリン・ウォー、ブライズヘッドふたたび
- Michael R. Booth, *Victorian Spectacular Theatre 1850—1910*
- 中野嘉一、前衛詩運動史の研究——モタニズム詩の系譜
- T. Hachtman, *Gertrude's Follies*
- Philippe Aries, *The Hour of our Death*
- マリロジョゼ・バルボ、知りたがらない日本人——フランス人の見た部落問題
- 孟元老、東京夢華錄

ここにこう書き出したものを見直すと、私自身あらためて一種

の衝撃をおぼえないわけにはいかない。あまりにも支離滅裂でない、ことに対してである。それに新刊本が圧倒的な部分を占めていることもやはりシロクである。空間的な広がり、時間的な深さ、そのいずれをとってもこの書目がきわめて片寄った狭いものであることは歴然としている。

が、よくも悪くもこれが今現在の私の魂のかたちである。本に換算された魂のかたちである。(ついでにいえば、魂は本に換算することができるという前提の上に編集者という職業はかろうじて成立しているのである。) この魂のかたちは流動している。新陳代謝をしている。というのは、読み終えられた本や読み続けるのをきっぱりと拒絶されてしまった本たちは、これから読まれるはずの本たちと次々に入れかわることになるからである。こうしてこの集合は、体重を多少増減させながら、太りすぎもせずやせすぎもしないで生きつづけていく。この新陳代謝をおこなう流動体は、いわば原形質なのである。これは単なる比喩以上のものである。なぜなら読書という行為は、結局無機物を有機物に転化させる原形質の生の営みのプロセスに等しいといえるからである。著作者の脱け殻あるいは排泄物ともいふべき死物としての本を、生き返らせ血肉と化するの読者による読書という行為なのである。本というものが、いつの間にか増えて、インベーダーのよう

に空隙を侵し占領するようになるのも、本の集合体が自己増殖をする原形質だからなのである。私は一冊一冊の個性的な本ではなく、この種の匿名性の衣をまとった本の集合体を基本的な単位としたコミュニケーション読書論が構想されなくてはならないだろうと考えている。

さて、三〇冊を越える本を同時に併読することはそもそも可能なのか。もちろん可能なのである。いうまでもなく、可能なように適当に手を抜いて併読するからである。人間は不可能を可能にするべく運命づけられた生き物であるなど大仰なことをいうつもりは毛頭ない。しかし私にだって本当をいえば好きでたまらない本の二冊や三冊はもちろんあって、そういう本はそれこそなめるように何度も読み返している。だが、いかに人に読まれる可能性の絶無に近い雑誌とはいえ、そんなプライベートの核ともいうべきものを公表して、自分の魂の深奥部を白日のもとにさらけ出す気にはとうていなれない。せいぜいあたかもたくさん読んでいるふうをよそおって書目を示し、魂のかたちの輪郭をあらわにするばかりである。

だが輪郭を示すだけの手抜き読書法にも、それなりの利点がないわけではない。体調、機嫌ともによく、ついでに天気もよく、さらには酒や食事がよかったりすると、あまり恵まれてはい

ないはずの勘がどういわけか妙にさえて、思わぬアイデアを産出することがある。つい先日それがおこった。劇画『ライブ・オデッセイ』と『イストラム辞典』を併読中に、突如すばらしい構想が浮んだのである。それがいかにスリリングな興奮に満ちた名案であるかをここで大衆的に判断していただけないのは不幸というべきか幸いというべきか。何しろご存知のように、サラリーマンの社会には守秘義務という大きな壁がそびえているのである。

(三省堂出版局)

